

北海道

がん研究最前線わかりやすく

田中、藤田教授が解説

北大創成研究機構シンポジウム

北大創成研究機構は、第十回創成シンポジウム「北大から世界へ」がん研究最前線」を同大学術交流会館で開催。トークセッションでは腫瘍病理学分野の田中伸哉教授、遺伝子病制御研究所分子腫瘍分野の藤田恭之教授が、一般市民向けにわかりやすく最前線の研究等を紹介した。

田中教授は「がんに挑む病理学」と題し講演。遺伝子増幅の説明として細胞を書店に、染色体数を売り場の階数に、遺伝子を本にたとえ、「陳列されたジャンル以外の本が多くなり、他の本が消える」などの比喻を用いて解説。HER2によるがん化メカニズムには東京の地下鉄路線図を重ねた。



トークセッションでは田中教授(中央)と藤田教授(右)が会場内を盛り上げた

▽「病理診断が治療を決める」コンパニオン診断▽蛍光物質の活用▽遠隔地病理診断ネットワーク▽がん幹細胞—等についても、当意即妙な語り口やユーモラスなたとえを織り交ぜ、観客は大きくわくと同時に深くうなずく姿も多数見られた。

続けて藤田教授は「正常細胞ががん細胞を駆逐する」と題し、新規がん治療法開発に向けての研究を紹介。がんタンパク質Rasの発現をコントロールできる正常細胞を用いた研究を取り上げ、正常細胞に囲まれたがん細胞が細胞層から離脱して体外排出されたり細胞死したりする結果を示し、「正常細胞とがん細胞は互いの違いを認識している」と語った。

がん細胞との境界で正常細胞内の分子ビメンチンが活性化し、がん細胞を「首を絞めるような動作や、突くような動作

で駆逐する様子を映像で公開。「正常細胞とがん細胞の社会性を用いた全く新しいタイプの治療法」について期待感を述べた。藤田教授も軽妙な語り口で会場内を盛り上げた。

基調講演では白土博樹放射線医学分野教授が、医学と理工学の融合をテーマに陽子線治療装置開発について解説し、二十六年春に稼働する陽子線治療センターをアピールした。

がん緩和医療を追究

札幌医科大学 2講座設置

札幌大は一日付で、がんの緩和医療に関する二講座(特設講座、寄付講座)を設置した。

特設講座「がん疼痛緩和と医療学講座」は、がんに関連した疼痛や悪心・嘔吐・呼吸困難などの各種症状に関する機序の解明▽症状緩和に関する研究▽症状コントロールを適切に対応できる医療人育成—を行う。文部科学省の大学改革推進等補助金「がんプロフェッショナル養成基盤推進

プラン」を設置財源とし、設置期間は二十九年三月三十一日まで。担当教授(兼務)に山蔭道明麻酔科学講座教授が就いた。一方、寄付講座「アイソファーマシー・二トリ緩和と医療学推進講座」は、二十四年度まで設置されていた緩和医療学講座を継承。がん患者と家族の全人的な苦痛・苦悩にアプローチする臨床研究を進める。多職種連携によるチーム医療推進へ、人材育成、市民啓発に取り組み。代表教員に杉本直子特任助教、担当教授に山蔭教授が就任しており、二十八年三月三十一日まで設置予定。